

地域学習に関する高大連携カリキュラムの可能性について

The Possibility of Establishing a New Local Study Program as a Cooperation of High School and University Education

北林健二^{*}, 齊藤理^{**}

Kenji KITABAYASHI, Tadashi SAITO

Abstract :

The purpose of this research is to investigate concretely what kind of learning effect students can get through local study program, to search for it's most beneficial learning method, and to show how the teacher combines high school and university education and creates a new curriculum learning local study, particularly for local history, in order to activate today's high school education.

The author of this paper found, through literature search on prior research and principally analysis of the questionnaire survey about the motivation for learning of university students who planned a local study program together with local residents, a walking tour around their campus in October and November 2011, that especially fieldwork study was the most effective method.

A further important point was that this fieldwork study produced a desired or intended result not only for these students, in terms of arousing their learning motivation and ability, but also for the community residents themselves, because they could rediscover their own culture and history by this local study program.

Based on this results the author suggested here as a conclusion three new learning methods, as a collaboration of high school and university education, applicable also in the history classes at the high school.

The future direction of this study will be an even more detailed examination of the effectiveness of these new methods.

キーワード：地域学習, フィールドワーク, 高大連携

Key words : Local Study Program, Fieldwork, Cooperation of High School and University Education

1. 本研究の背景、目的

1-1 問題の所在

地域を素材とした歴史学習とは何か。それはたとえば、フィリップ・アリエスの「集合的な歴史は特殊な歴史の総和でもないし平均でもない」¹⁾との言葉に端的に示されているように、歴史の叙述を中央史の普遍性に終始させず、地域素材の個性性に立脚させようとする歴史学習の視点をさす。

歴史の授業を活性化するための視点の1つとしてしばしば提言されてきたものに、この「地域素材の教材化」がある。この視点は教育現場で児童生徒の主体的な取り組みを促すのみならず、地域の歴史を振り返ることを通して地域住民の誇りを醸成できる、新たに地域の歴史的記憶を発掘して文化遺産を愛護保存するといった形で地域へ貢献できるとの見方もある。

この学習形態は、小・中学校においては比較的積極的に導入されているようだ。しかしながら小・中学校以外の教育現場における導入の方法論については、これまで十分に論じられてきたとは言い難い。それは、次のような課題による。

* 山口県立大学国際文化学研究所 Graduate School of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

** 山口県立大学国際文化学部 Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University, Dr.Eng.

- 1) 地域を主題学習として扱うための、まとまった時間の確保が難しいこと
- 2) 教室内で地域学習を展開させるには限界があるが²、校外学習は時間や準備の関係で難しいこと
- 3) 担当教員の負担が過重になる危惧があるが、先行事例を参考にしようと思っても事例の絶対数が不足していること。さらに情報交換のための地域内ネットワークも地域間ネットワークも存在しないこと

そもそも、地域学習は学習者をはじめとする周囲の理解を得ることが難しいとの指摘もある。³

そのため、これまでは教育現場の時間的・空間的制約を度外視した学習活動や、難解な地域資料の紹介が多かった。また地域素材を具体的にどう教材化するかについては現場に依存される上、個々の研究成果を共有するしくみについて提案する視点を欠いていた。

そこでこうした課題を打開するために、地域学習の現状を手法の面から整理・分析し、新しい枠組みの中で展開する必要があると認識している。本稿では高等学校と大学との連携にヒントを求めたいと考えている。

なおその際の問題関心は、地域を素材とした学習活動の重要性とその理由を再確認するものではなく、これから地域素材を学習場面でどのように扱っていく手法が効果的なのかを見ていくものである。さらに本稿はこれまでの実践事例を否定するものではない。むしろそのような実践の蓄積の上に、現時点でどのような活用手法が効果的に機能するのかを検証するという趣旨に基づいている。

1-2 研究の目的

したがって上述のことから、今後の地域学習の導入を促す上で、以下の点を明らかにすることが有益だと考えられる。

- 1) 地域学習には具体的にどのような効果があるのか
- 2) 地域の歴史を素材とした効果的な学習手法は何か
- 3) 高大連携による地域学習の新しい手法にはどんな可能性があるか

1) では、地域を素材とした歴史学習によって、具体的にどのような効果が得られるのかを検証したい。

また、2) では、おもに大学生の地域実習の実践例からその手法と結果について考察し、地域を素材とした歴史学習はどのような手法が効果的であるのかを分析したい。

さらに3) では、大学生や地域の期待などを参考にしながら、地域を素材とした歴史学習に関する具体的な高大連携カリキュラム創出の可能性についても検討したい。

よって、次の手順で研究実践を行うこととした。

- a 文献研究
- b 地域を素材とした歴史学習の実践
- c 企画の運営に携わった学生へのアンケート調査
- d 企画を支援した地域住民や行政担当者および大学関係者へのヒアリング調査

なお、今回は大学生の調査にとどまるが、高校生を対象とした研究実践については別稿で実証してみたい。

2. 学校教育における地域学習の手法

2-1 小・中・高等学校における、地域を素材とした歴史学習の手法

小・中・高等学校における、地域の歴史を素材とした学習手法にはどのようなものがあるだろうか。

プリントを用いない講義形式の授業に、問答法によるものがある。たとえば、学校の敷地がかつては軍用機を開発するための施設だったこと、その敷地は農地から強制転用され、今も屋敷林が残ることなど、土地の記憶を題材に日本史Aの授業を展開した実践事例がある。生徒の感想文によると、こうした生徒からの授業入力に立脚した授業実践を通して、身近な歴史の存在に気づかせることに成功している。そして「授業で獲得させた新たな地域を見る目で、今まで視野に入ってはいても認識できなかった事実を生徒に認識させ、さらに過去の出来事のリアリティーを高めることができる」と高等学校で地域教材を扱う意義について再評価している⁴。問答法に基礎をおく授業実践の有用性については、かねてより宮原武生⁵や黒羽清隆⁶らが提言していたものである。

この他に地券⁷や戦国大名の書状⁸、自分の成長記録⁹など実物資料を用いた授業実践報告がある。

また、佐古利南は試験問題への導入を積極的に行って、その有用性、実現性について多くの報告をしている¹⁰。この手法は筆者もこれまで多様な学力を有する生徒を対象に実践してきた。そして一定の成果を実感しながらも客

観的な検証には至らず、その成果を共有することができていない。なお、外部講師の招聘についての報告は1例を確認するにとどまった。¹¹

しかしながら上記のような授業実践は、実際に導入しようとするとなかなか阻害要因があり、むしろ少数派にとどまっているのが現状である。

これらの授業手法の分類については、資料の「印象」に注目した今谷順重¹²や、「形態」に注目した谷川顕英¹³らの先行研究が知られている。また近年においては外池智¹⁴が〈資料的学習材〉〈臨場的学習材〉〈人的学習材〉の3類型を提唱している。これは地域素材を教える材料としての「教材」ではなく、学びの材料としての「学習材」の観点から分類した研究で、非常に興味深い。

これら先行研究を総括すると、有効であると考えられる手法は、とりわけ以下の3点が指摘できる。

- a プリントを活用した主題学習
- b ワークショップ形式の学習
- c フィールドワーク

2-1-a プリントを活用した主題学習

プリントに掲載する素材に着目すると、以下のような類型があげられる。

①	地域の写真（遺跡・人物・民俗資料・記念碑等）を用いたもの
②	地域の金石文の拓本を用いたもの
③	地域の新聞記事を用いたもの
④	地域の遺跡の復元想像図を用いたもの
⑤	地域史の年表を用いたもの
⑥	地域の古文書の文面を活字で紹介して用いたもの
⑦	地域の墨書土器・木簡・古文書の写真を用いたもの
⑧	地域の研究成果を記した文献を用いたもの
⑨	地域の研究成果を記した数値データを用いたもの
⑩	地域の遺跡・史跡・歴史地図（新たに作成）を用いたもの
⑪	地域の古地図・古絵図（当時に作成）を用いたもの

①の手法は、大分市内の文化財をスライドで見せて、身近なところにすぐれた文化財が残されていることを知る機会とした実践がある。¹⁵

⑥の手法は下地中分の実検帳を用いて荘園侵略の実態を考えさせる実践¹⁶などがあるが、筆者がもっとも得意とするもので多くの実践事例を持つ。

⑧の手法は、教科書に記載された中央史とは明らかに違う様相を見せている地域史の実例、たとえば一般的に古墳が小規模化する古墳時代末期に、逆に壱岐の古墳が巨大化していることをあえて主題として扱い、歴史の多様性を伝えているもの¹⁷や、大友宗麟の年譜に関連した資料を用いて、宗麟の年齢に沿って、権力の確立・支配拡大・抗争の日々を想像させるもの¹⁸、臼杵と別府の米騒動の経過を追って当時の地域の様子から米騒動の原因や意義について推論させるもの¹⁹がある。

⑨の手法は、日清・日露戦争の戦死者数を材料にして近代戦の実態について考えるものがある。²⁰

⑩の手法は、日本の領域を南西諸島まで視野に入れると生徒の住む壱岐地方が日本の中央部に位置することに気づかせ、どこが日本の中央かという概念は政治的に定義づけられていること、さらに東アジア近隣諸国との距離の近さに気づかせることを通して、多くの生徒を驚かせると同時に、視点の違いによって見方が変わるという意識を与えることに成功している実践がある。²¹

⑪の手法は、府内の古地図（絵図）を教材にして、現在に残る痕跡を確認させるものがある。²²

このように、プリントを活用した主題学習は大がかりな準備を必要とせず、扱いやすい手法として教育現場に定着している。その理由を整理すると次のようになる。

- 1) 時間の確保が難しい場合でも、始業前に配布したり課題扱いとしたりするなど運用上の工夫によって利用しやすいこと
- 2) 実物や直接体験には及ばないが、児童・生徒が手許で追記しやすく発展学習に結びつけやすいこと

3) 原稿の管理・更新を確実にを行うことによって、指導者の負担を軽減させる効果があること

2-1-b ワークショップ形式の学習

教師がファシリテーターとなり、生徒の自主的な活動を支援するワークショップ形式の授業の実践報告には、次のようなものがあげられる。

①	先行研究によって得られるデータから地域史を作成させるもの
②	生徒の感想文を用いて紙上討論させるもの
③	生徒に仮説を立てさせて討論させるもの
④	命題を与えて、生徒に推論させるもの
⑤	地域の文化財を紹介する映画を制作するもの
⑥	シミュレーションを用いたもの
⑦	生徒に家族史の年表を作成させるもの

①は千葉大空襲の際の証言をもとに、どの地区で何人死没したかを記入した家並復元図と、防空総本部発表による情報、当時の新聞記事による情報を比較させ、地域の歴史的記憶を調査保存することの意義を考えさせる授業実践の報告がある。²³

②は「日本は反省なき民族か？」を題材として集めた感想文を並べて印刷し、生徒の心を揺さぶる授業がある。²⁴

⑤は自ら地域素材を用いて飛鳥～天平の仏教文化の映画を制作し、それを高校3年生に視聴させる授業を展開した実践報告である。そしてその結果、考査の正答率を2～15ポイント上昇させている。また感想文を見ても「個性ある仏像に驚異と面白みを感じた」「時代による変化も興味を持って鑑賞できた」などと、確実に生徒の関心を引き出している。²⁵

この他、小学校ではカルタをつくる／すごろくをつくる／校庭に絵を描く、といった授業実践も報告されている。

このように、ワークショップ形式の学習は児童・生徒の主体性を促す手法として高く評価することができる。その理由を整理すると次のようになる。

- 1) 児童・生徒からの授業入力が多いこと
- 2) 具体的な作業場面が多いこと
- 3) 結論ではなく、結論に至る過程を学習するため歴史的思考力が育つこと

2-1-c フィールドワーク

授業時間中に実施された事例は乏しいと思われるが、フィールドワークについての実践報告はいずれも高い効果を持った手法として報告されている。どのような機会を捉えて実施したのかを分類すると以下のような実践があげられる。

①	長期休業中の課題としたもの
②	授業時間を用いて地域の資料館を訪問するもの
③	授業時間を用いて地域の史跡を訪問するもの
④	サークル活動の一環で実施するもの
⑤	学校設定科目を利用したもの
⑥	長期計画に基づいて研究発表させたもの
⑦	総合学習を利用したもの
⑧	旅行的行事を利用したもの

①は夏期休業中の課題として出されたもので、文献研究や現地取材、関係者へのインタビューなど、生徒が工夫して主体的に取り組んだ様子を報告した実践がある。この実践では自主研究を終えたあと、生徒たちが「時間がなくてできなかったけれど、自分の祖父の代まで行われていた鯨漁について調べたかった」「結局調べ方がわからなかったけれど、自分の住んでいる近くの地名の由来について調べたかった」などと記していて、生徒の意欲喚起に繋がる実践であったことがわかる。²⁶

②はワークシートを手に近隣の郷土資料館を訪れる実践があり、この校外学習では自分の目で展示物を見る姿勢

を培い、さらに実物を前にして教科書的な知識を具体的なイメージへと昇華させることに成功している。²⁷

③は勤務校のバスを使って大分市内の古墳を訪れて現地で解説を聞くもの、および40人余が3.5kmを2時間かけて歩き、城下町の痕跡を巡検する実践がある。生徒からは「懐かしく楽しい」「いくつもの新鮮な発見があった」「新しい疑問を持ちはじめた」「文化財保護の重要性に気づいた」などの感想を引き出しており、「生徒たちは、自分の足で歩き、目で見て耳で聞いて、悪臭を嗅ぎ、まさに五感をフルに使って学習した」との手応えを得ている。²⁸

④は顧問をつとめる郷土史研究部の活動報告があり、中学生や高校生たちの熱意と能力が紹介されている。²⁹

⑤は独自の学校設定科目〈総合社会〉で高校2年生に地域に関する論文を書かせる実践がある。この取り組みを通じて、「通常の教室での講義中心の歴史教育では決して得られないものを生徒たちは得ることができ、高い学習効果を生徒諸君に与えることができたと言える」との確証を得ている。³⁰

アメリカ国立訓練研究所（NTL）に、学習スタイルについての研究がある。³¹それによると、教育内容が人の記憶に残る割合は、講義を受けることで5%、読書では10%、体験的学習は75%、他人に教えることあるいは相互に学び合う体験では90%という調査結果がある。このように、フィールドワークを用いた地域学習は、千の言葉を尽くすよりも人間の心を動かすものであると言える。フィールドにはそういう力があるのだ。

2-2 大学教育における、地域の歴史を素材とした学習手法

大学生が地域学習の実践を通して、まちづくりに貢献したことを検証した研究もある。コミュニティの希薄化が進行する地域に対して大学は何ができるかという視野に立つもので、東北公益文科大学の実践が紹介された白迎玖の実践研究に詳しい。³²

その実践はフィールドワークを基軸としたものだが、さらに以下のように類型化できる

①大学生が地域に出て行って活動するもの

これには、まちづくりの市民講座開催や講師派遣などがある。また、「街なかキャンパス活動」と名付けられた、商店街や商工会議所が空きビルを大学等に提供し、行政の支援も得て、学生や教員が展示・討論・コンサートなどを開いたり、時にはカフェなどを運営したりする実践も紹介されている。

②大学が地域の人々を学内に招いて活動するもの

これには、大学の施設・行事の解放などが紹介されている。

③大学と地域の人々が一緒になって活動するもの

これには、お祭り興しおよび講演録・地域マップの刊行などが紹介されている。

④行政と一緒にまちづくりを支えるもの

これには、まちづくりの企画段階から大学生が参加するものや、新たな視点からのまちづくりの提言、および福祉マップづくりなどが紹介されている。

これらの実践は関西学院大学や愛知大学にも引き継がれ、「大学の方が、地域との協力・連携やまちづくりの場・拠点を学内に用意、提供する時代になってきた」³³と、大学と地域の関係が近年大きく形を変えてきたことを前提に、様々な関わりの実践例を紹介している。

また、松本大学は地域社会の「現実から出発して、それを理解するために必要な知識体系を含めた学びを次々と広げていく」という帰納的な教育手法を通して、地域と大学が協働で若者を育てていくことが、長期的に見て持続可能な地域づくりに欠かせない要素であることを指摘している。³⁴

さらにこうした活動には多くの市民が参加し、継続的に寄付を寄せている。たとえば公益大へは、住民による後援会や地元の銀行が毎年寄付を寄せているし、市民個人による絵画・書物などの寄付、地域の資金援助による講演録の刊行などがある。こうした事実は、地域への貢献度を物語る何よりの証左であろう。著者が「大学づくりは、たんなるキャンパスや校舎づくりではない。大学のみで、大学・キャンパスをつくって終わりではなく、まちづくりや環境づくりの一環である。地域と共に協働・共創の理念と方法で取り組むまちづくりを目指すものでなくてはならない」としているように、地域を舞台に展開される教育活動がまちづくりに貢献できるという考え方は、一定の評価を得た着想であると言える。

このように、大学教育においては地域を素材とした学習活動は地域貢献の一環として積極的に導入する大学が増えている。フィールドワークを基軸とした展開が多く見られる理由を整理すると次のようになる。

- 1) まとまった時間の確保がしやすい
- 2) 指導者の裁量に委ねられる部分が大きく、多様な学習形態を設定することができる
- 3) 理念や知識獲得のみならず、主体的・実証的見地からの取り組みが求められている

3. 大学における地域学習の実践事例

2章において検証した文献研究から導かれた、有効であると考えられる手法を大学生の地域学習に応用し、その効果を検証することとした。

県立大学の周辺には、宰相寺内正毅（1852-1919）の足跡が身近に多数残されている。そして大学のすぐ傍には旧寺内桜圃文庫があるのだが、それが現在廃屋のようになっていることを県立大学生たちは非常に残念に感じていた。そこで、その場所の文化的な利活用について考える上で、以下に示すような地域学習モデルを大学生が主体となって立案した。

〈企画名〉「寺内正毅ゆかりの地をめぐる徒歩ツアー」

〈目的〉

- 1) 事前学習として宮野地区の長老らに地域の歴史や寺内の生涯・功績について伺う場面で、大学生の地域交流を行う
- 2) 旧桜圃寺内文庫の文化的な利活用の可能性をさぐるとともに、ツアーを通して県立大学構内および周辺環境のPR効果を狙う
- 3) 教科書に記載された寺内正毅の人物像と、地域に伝わる人物像とのギャップをさぐる

〈方法〉

- 1) 宮野駅を出発（寺内が自分の家の前に誘致したと伝えられる駅および山口線の歴史概説）
- 2) 旧寺内桜圃文庫の建物前（寺内の生涯、宮野との関わり、文庫設立の経緯）
- 3) 県立大学図書館（寺内桜圃文庫の紹介、寺内の朝鮮での功績、書物の文化的価値について）
- 4) 新キャンパスを通り、寺内親子の墓を見学（県立大学の沿革、宮野財産区の経緯、息子寿一について）
- 5) 宝篋印塔、石風呂観音堂（石風呂の由来）

〈準備〉

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1) 情報交換を兼ねたミーティング | 7/14,9/15 |
| 2) 地域での勉強会 | 7/27,9/28,10/14 |
| 3) 地域巡検 | 9/28 |
| 4) 講演会への出席 | 11/1 |
| 5) 室内リハーサル | 10/27,11/18 |
| 6) 現地リハーサル | 10/28 |

〈参加者数〉

第1回 10/29……12名

第2回 11/19……10名

その後企画運営に携わった学生たち6名にアンケート調査³⁵を実施して、学生の意識がどのように変化したのかについて調査した。また、当該企画を支援した地域住民や行政担当者および大学関係者8名へヒアリング調査を実施して、学習手法の可能性と、地域貢献に対する学生の意識との乖離を分析した。さらに、学生たちに対してはヒアリングや観察法も援用してトライアンギュレーションへ配慮した。

なお、今回の調査はプレテストとして実施したものであり、母集団数の限界を持つものであることを付記する。



情報交換を兼ねたミーティング



当日の様子（地域との交流）



当日の様子（宮野駅出発）



地域での勉強会



当日の様子（旧寺内桜園文庫の建物前）



室内リハーサル



当日の様子（寺内正毅・寿一親子の墓）

4. 学生はどう捉えたか

2度目の企画終了13日後に、当該企画運営に携わった学生たちに無記名の質問紙法によるアンケート調査を実施した。その結果について報告する。

4-1 学生アンケート結果から① 教育現場での実践の実情と学生の意識

中学校・高等学校の教育現場ではどれくらい地域学習が行われているのだろうか。また、学生たちの中に地域学習への期待がどのくらいあるのか、実際にやってみてどのような印象を抱いたのかを整理する。

【中学時の地域学習】は6人中5人が〈あった〉とし、残る1名は〈覚えていない〉と回答している。ところが【高校時の地域学習】では〈あった〉が2名、〈なかったが、あるとよかった〉が2名、〈覚えていない〉が2名である。

また、【学習意欲向上に役立った個人準備作業】で〈役立った〉と感じているものは、5名が選択したものに〈現地での情報収集〉〈斉藤研究室での情報交換〉〈現地でのリハーサル〉があり、大学生の多くがフィールドワークに意欲を示し、また実際に体験して高い手応えを感じていることがわかる。また【興味を持って臨めた地域勉強会】では地域交流センターでの古老からの勉強会を2名が〈興味を持って臨めた〉、4名が〈まあ興味を持って臨めた〉としている。さらに地域巡検は6名全員が〈興味を持って臨めた〉学習活動だったと回答している。次に【知識を他人に伝える体験】に対する印象を尋ねたところ、3名が〈関心があった〉、3名が〈まあ関心があった〉と、役割演技に対して高い関心を示していることがわかる。

ところが逆に、大学生にとって比較的負担が少ないと思われる〈図書館での情報収集〉は〈役立った〉が1名、〈まあ役立った〉が1名にとどまり、3名が〈あまり役立たなかった〉としている。また、ネットでの情報収集も〈役立った〉と高い評価をした者は3名にとどまった。

ここからは、次のようなことが読み取れる。

- 1) 高等学校における校外地域学習の機会の乏しさ
- 2) 地域学習や地域の人とふれ合うことへの学生たちの関心の高さ
- 3) フィールドワークの手法の意欲向上効果の高さ

4-2 学生アンケート結果から② 学生の意識変化（地域への関心）

高校生の時の地域史への関心度はどうだったのだろうか。また、この企画を通して学生たちの地域への関心度はどのように変化したのかを整理する。

【高校時の中央史への関心】で〈あった〉と答えている者は3名、〈まああった〉とした者は1名である。ところが【高校時の地域史への関心】では〈あった〉と答えている者は1名、〈まああった〉とした者は2名であり、〈なかった〉としている者も1名ある。

ところが、【企画への取り組みの自己評価】で〈活動終了後に地域文化への新しい視点が生まれたか〉と聞くと〈そう思う〉が4名、〈まあそう思う〉が2名と、顕著に高位に位置している。また【地域への関心が高まったか】では、活動以前は〈どちらでもない〉が1名、〈あまりなかった〉とした者が3名いたのだが、活動してからは〈高まった〉が3名、〈まあ高まった〉が3名となった。さらに【地域の歴史に関心があるか】では地域の歴史に〈ある〉が1名、〈まあある〉が4名となった。

ここからは、次のようなことが読み取れる。

- 1) 中央史に対して関心の高い高校生像

(1) アンケート調査の方法
12月2日(金) 大学内の一室において当該企画にかかわった大学生と面談でアンケート実施
アンケート総数 6件(有効アンケート数6件)
(2) アンケート詳細
a アンケート調査の目的
① 教育現場での実践の実情と学生の意識を調べる
② 企画を通して学生の地域への関心度がどのように変化したのかを調べる
③ 企画を通して学生の主体性がどのように変化したのかを調べる
④ 学生の意識と地域の意識との乖離を調べる
b アンケート項目
【質問1】
① 中学生のとき、地域学習をしたことがあるか
② 高校生のとき、地域学習をしたことがあるか
③ ②の時期や回数など
④ 高校生のとき、中央史に興味があったか
⑤ 高校生のとき、地域史に興味があったか
⑥ 高校の授業(歴史や地理)は主体的に取り組んだか
⑦ 大学の授業は主体的に取り組んだか
【質問2】
① 寺内企画をやってみようと思った動機(順位をつけて2つまで)
② 寺内企画への取り組みの姿勢を自己評価するかどうか
③ 寺内企画を通して地域文化に対する関心はどのように変化したか
④ どのような個人の準備作業が学習意欲の向上に役立ったか
⑤ どのような地域での勉強会に興味をもって臨めたか
⑥ 自分が調べた知識を他人に伝える体験はどんな印象だったか
⑦ 寺内企画をやってみてどんなことを感じたか(順位をつけて2つまで)
⑧ 他にやってみなかった地域活動の方法は何か(3つまで)
⑨ 高校での歴史学習と比べて感じた大きな違いは何か
⑩ もっとも印象に残ったところはどこか
⑪ 他にコースに組み入れたかった場所はないか
【質問3】
① 地域の人々は県立大学にどんなことを期待していると思うか(3つまで)
② 寺内企画について気づいた改善点は何か
③ 寺内企画について採集できた改善点は何か
④ 寺内企画について採集できた喜びの声は何か
⑤ 今回の企画は地域のまちづくりに貢献できたと思うか

2) 地域史に対して関心の低い高校生像

地域史へ関心の低い理由は以下の通りである。

〈どちらでもなかった〉「田舎だったので、重要視していませんでした。高3の受験の時に地元を離れることになって、後悔しました」(女子)

〈あまりなかった〉「特に、自分の地元について深く考えたことがなかった」(男子)

〈なかった〉「考えたこともなかったから」(男子)

このように、受験に直結する中央史には関心が高いが、考察する機会の乏しい地域史には関心の低い高校生の意識がうかがわれる。

3) 地域学習を通して大きく変容した地域への関心度

ヒアリングによって学生から得た感想に、以下のようなものがあった。

「住んでいるのは寺内墓所からそう離れていない。住んで1年経たないが、古くからの住民のような意識になってきた。友人が遊びに来た時も、『何もないよ』じゃなくて、紹介できるのが嬉しい。しかも、全国的に有名な観光名所でなく、少し丁寧に地域の歴史を見ることによって見えてくることを、アカデミックに話せるのが誇らしい」(女子)

この感想は、地域学習を通して地域への愛着が学生の中に醸成されることを伝えている。

4-3 学生アンケート結果から③ 学生の意識変化(主体性)

この企画を通して学生たちの学習に対する主体性はどのように変容したのかを整理する。

【高校・大学時(前期)の授業への取り組み】を見ると、〈宿題や板書の書写や説明事項のメモ〉はよくやり、〈予習や復習〉になると〈やった〉と回答できる学生は1人もいない。また〈先生への質問や自主的な調べ学習〉に取り組む学生は顕著に減少する。

ここからは、次のようなことが読み取れる。

- 1) 他律的な学習活動はまじめに取り組む学生像
- 2) 自律的・主体的な学習活動を苦手とする学生像
- 3) 大学に入学して居眠りする学生の増加

ところが、【企画への取り組みの自己評価】で〈熱心さ〉〈楽しさ〉〈達成感〉〈再現意欲〉について調べると、〈そう思う〉〈まあそう思う〉と回答した学生は83%にのぼっている。中でも達成感は6人中5人が〈あったと思う〉と回答している。さらに【高校での歴史学習との違い】についての自由記述では、以下のような回答が得られた。

- ・自分が疑問に思ったことを追究し、深く知ることができる。(女子)
- ・自分から動くことが大きいと思いました。発信することの難しさを感じました(女子)
- ・実際にその場へ行けること。しかもそれが授業ではなくて、自分たちで「企画」をしているという自主的なところ(女子)
- ・自分から掘り下げていくもの(女子)
- ・高校の授業はただの歴史の羅列で、あまり意味はないと思っていたが、今回は自分で調べないといけないので、難しかったが、とてもやりがいを感じた(男子)
- ・眠くなかった(=比較的楽しみながらすることができた)(男子)

このように、今回の企画が学生の意欲喚起に大きく寄与していることが読み取れる。

また、他にやってみたかった地域活動の手法を尋ねると、〈イラストマップ制作〉が4人で最多となり、〈参加者へ配布する資料作成〉〈ワークショップの開催〉〈webでの情報発信〉が3人であった。これらの結果は学生の意欲の所在を示すものであり、今後の展開を図る上で貴重な資料となった。たとえば、次のような学習手法が考えられる。

- ・大学生が地域について調査した成果をイラストマップや地域資料としてまとめてweb発信する。小・中・高等学校ではそれを用いて授業を展開したり試験問題を作成したりする。

4-4 学生アンケート結果のまとめ

学生へのアンケートおよびヒアリングの結果を総括すると、地域を素材とした歴史学習のおもな効果を3つにまとめることができる。

1つは、地域を素材とした学習活動は、それが歴史を素材とするものであっても学習者の意欲・関心・主体性を醸成することである。その体験の記憶はすでに中学時にあり、大学での地域学習は、成長した彼らの学びのスイッチを再び入れることに等しい。

2つは、歴史を学ぶ感動を体験できることである。中央史は地域史の東である。地域学習を通して、これまで机上で学んできた教科書の「歴史」が、生活圏のスマールヒストリー、オーラルヒストリーと繋がる瞬間は、学生にとって何のものにも代え難い感激をもたらしたようだ。たとえば、ある男子学生は次のようなことを語っている。「住んでいるのは山口中心部で、宮野は生活圏とは言えない。けれどもこうした活動をして、とても愛着がわいてきた。故郷にいる友人に寺内正毅のことなどを話すと、教科書に載っている人物でもあり、とても感心された。なんだか嬉しい」

3つ目は、同一の事柄でも見る角度を変えることによって評価が変わる効果があることを実感させる好機とできたことである。今回のように教科書に記載された寺内正毅の実像を地域で再確認すると、出世しても故郷を忘れない陸軍元帥といった意外な側面も見えてきた。

5 地域の反応

2度目の企画終了後から、当該企画を支援した地域住民や行政担当者および大学関係者へヒアリング調査を実施した。その結果について、どんな立場の人がどういった回答をしているのかに着目して報告する。

5-1 地域ヒアリング結果から① 可能性のある手法

各手法とも、比較的高い評価を得た。ただし、ヒアリング対象とした8名すべてが〈可能だ〉とした地域学習の手法はない。特に【大学図書館の利用機会拡充など学術情報の提供】を大学生の学習の手法とするには、学生のスキルや大学側の諸条件の整備など課題が多く、地域住民、行政担当者、大学関係者ともに可能性は低いとの回答を受けた。これは今後の課題としていきたい。

(1) ヒアリング調査の方法
12月8日(金)～12月19日(月) 地域住民、行政担当者、大学関係者それぞれを訪問して、面談でヒアリング実施(聞き取りメモおよびボイスレコーダー併用)
ヒアリング総数 8件(有効サンプル数8件)
(2) ヒアリング詳細
a ヒアリング調査の目的
① 企画の全般的な評価およびまちづくりへ貢献度を調べる
② まちづくりにおいて実現可能だと考える学習手法を調べる
③ 県立大学に期待することを調べる
④ 大学生に期待することを調べる
b ヒアリング項目
① 企画のよかった点は何か
② 企画の改善点は何か
③ まちづくりにおいて実現可能だと考える学習手法は何か
④ 県立大学に期待することは何か
⑤ 大学生は地域に対して何ができるか
⑥ 企画はまちづくりに貢献できたか
⑦ ⑥の理由は何か

5-2 地域ヒアリング結果から② 大学に期待すること

【県立大学に期待すること】について、ヒアリング対象とした8名すべてが〈期待している〉とした項目は〈新たな視点からの地域の特色の発掘〉のみであった。それ以外の項目について、立場ごとの大きな差異は認められない。

これについて学生側に【地域が大学に何を期待していると思うか】と尋ねたところ、同様に〈新たな視点からの地域の特色の発掘〉が3人ともっとも多かった。そして〈すぐれた人材の輩出〉〈地域との交流やまちづくりの拠点の運営〉〈大学内施設の開放など地域の憩いの場の提供〉〈斬新な地域イベントの創出〉〈地域の歴史的記憶に関する文献資料の保管収集配布〉がともに2人と続いた。

地域ヒアリングから採集できた具体的な声は、以下のようなものである。

- ・宮野地区には埋もれた歴史がたくさんあるので、学生の手で日の目を見せてほしい。(地域住民)
- ・年を重ねると固定概念があって柔軟な発想ができないので、学生の発想力に期待したい。(行政担当者)
- ・他府県から来た者は、地域の人々が見慣れているものも資源だということに気づく。また、専門的な学習をした者の視点からしか見えない魅力もあると思う。(大学関係者)

ここからは〈新たな視点からの地域の特色の発掘〉は学生だからできることとして地域が期待し、地域に期待されていると学生側も認識している活動であると言える。

また【この企画が宮野のまちづくりに貢献できたか】については行政担当者1人、大学関係者2人が〈まあできた〉、残り5名からは〈できた〉との回答を得た。

これについて学生側に【貢献できたと思うか】と尋ねたところ、〈できた〉とした者が3名、〈まあできた〉とした者が3名であった。

学生自身が採集できた地域住民からの喜びの声は、以下のようなものである。

- ・今まで知らなかったことを知ることができた
- ・こういう風に駅を使ってくれて嬉しい
- ・地元なのにこんなところ（陸軍墓地）にきたのは初めてでびっくりした
- ・日本は最近ほころびがあるけど、やさしい学生たちとふれ合えてよかった
- ・地域に愛着が持てた
- ・学生とふれ合えてよかった
- ・寺内文庫の中を知ることができてよかった
- ・歴史に興味があるので楽しかった
- ・とにかく参加してよかった

また地域ヒアリングから採集できた地域への貢献度に対する具体的な評価には、以下のようなものがある。

- ・宮野駅管理者として、今回このような企画をしてもらったことを本当に感謝している。大学がなければできないし、駅の運営にこうした方針がなければできない企画だった。学生との繋がりが持てたことも嬉しい（地域住民）
- ・調査をして地域に伝えるという企画そのものがたいへん意義深い。たとえば、初めて通った道もあり、新しい散歩コースにして地域の歴史に思いを馳せている人もいないだろうか（地域住民）
- ・地元の人知らない地域の宝物を再評価してくれた。たとえば陸軍墓地や寺内寿一のことなど、地域について考えるきっかけを与えてくれたことは非常に意義深い（行政担当者）
- ・地域の評価は思いのほか高く、意欲も生まれている。一過性のものとするのは惜しい企画だ（行政担当者）
- ・大学生が地域の人と交流してくれたことを高く評価する。宮野地区は案外、県外からの入居者も少なくなく、客観視しているところがある。そこで新しい資源を発掘してメディアに乗せて情報発信している。このことは、地域の人々の喜びに繋がり、意欲を大きく喚起したことだろうと思う。次に繋がる可能性を秘めている（行政担当者）
- ・定期的な継続事業とすることができれば、口コミのネットワークなどを通じて盛会になっていく可能性もあるだろう（大学関係者）
- ・暮らしていても地域住民が気づかないことを学生が調べていること自体、大きな驚きだった。こうして知識が深まるという体験は、個人レベルではとうていできなかったことだと思う（大学関係者）
- ・宮野地域の方が大学生と一緒に生活圏をめぐることによって、今まで知らなかったことを新たに発見したのではないかと推測できる。地域への思いが深まり、今後の新たな展開の可能性をいくつも開く企画だったと思う（大学関係者）

ここからは、若い世代との交流そのものが地域の人々の喜びに繋がる可能性が読み取れる。

以上のヒアリング結果を総括すると、次のようにまとめることができる。

- 1) 地域は学生の柔軟な発想による地域資源の発掘に具体的な期待を寄せていること
- 2) 大学生や大学側が感じているよりも、地域で支援する立場の方々から高く評価されていること
- 3) 大学生による地域交流が地域貢献に繋がること

6 まとめと提言

6-1 地域の歴史を素材とした学習のもたらす具体的な効果

1) 学生にとって

地域を素材とした学習活動は、それが歴史を素材とするものであっても学習者の意欲・関心・主体性を醸成すること、歴史を学ぶ感動を体験できること、同一の事柄でも見る角度を変えることによって評価が変わる効果があることを実感させる好機とできることなど、これまで歴史学習が抱えていた諸問題の解決に繋がる高い効果を持つことがわかった。

2) 地域にとって

地域を素材とした学習活動に対して、地域は学生の柔軟な発想による地域資源の発掘に具体的な期待を寄せていること、大学生や大学側が感じているよりも地域で支援する立場の方々から高く評価されていること、大学生による地域交流が地域貢献に繋がることがわかった。

また、学生・地域双方が認識している活動は〈新たな視点からの地域の特色の発掘〉であり、今後の具体的な活動の方向性を示していると言える。

3) 展望

上記1) 2) を総合すると、地域を素材とした歴史学習は、学習者にとってはより質の高い学びに繋がり、地域にとっては閉塞状況を打開する可能性を期待できるなど、それぞれに好ましい効果をもたらすサービス・ラーニングの一形態であると言える。

6-2 地域の歴史を素材とした効果的な学習手法

2章における文献研究を通して有効であると指摘した学習手法は、以下の3点であった。

- a プリントを活用した主題学習
- b ワークショップ形式の学習
- c フィールドワーク

中でも今回の企画を通してさらに検証した結果、フィールドワークがもっとも効果的な学習手法であると考えられる。この手法は小・中学校、および大学においては積極的な導入が見られるが、高等学校では消極的にならざるを得ない実情も確認できた。そこで、地域と具体的な関わりを持たせる手法を高等学校にも応用した、さらに効果的なカリキュラムを構築する必要があるのではないかとの認識を得ている。

地域学習の高い効果や、学習者・地域相互の地域学習への期待度を考えると、新しい枠組みの中で地域学習の展開を追究することは意義深いと考える。そして学習者と地域との相互に幸福な関係をコーディネートするのは、文化の発信源としての地域の教育機関の責務である。³⁶

6-3 提言：地域学習に関する高大連携カリキュラムの可能性

そこで本論では地域を取り込んだ高大連携の新しい授業モデルを用いて、高等学校の授業に地域素材を導入する提案をしたい。限定的ではあるが、次のようなモデルが想定できる。

- 1) 2-1-aで述べたように高等学校においては、プリント学習が定着している。そこで授業場面へ導入の容易なプリントを用いた主題学習の手法を用いて地域史への興味・関心を培う。これは大学に入学してから本格的に行う地域学習の導入として位置づけることができる。この手法は大学生による地域交流の変容を促し、将来的に地域貢献できる人材の育成カリキュラムとなる可能性を開くのではなかろうか。
- 2) 4-1で述べたように大学生は地域の古老からの勉強会に高い興味を示して臨んでいる。そこでこの手法を高等学校にも採用し、ワークショップの一環として地域の古老に話を聞く地域学習会を実施する。初対面の人から話を聞き出すという体験が重要だが、難しい場合は学校への招聘による学習会とする。
- 3) 1-1で述べたように高校生が遠方に出かけることは難しい。しかしながら大学生は4-1で述べたように知識を他人に伝える役割演技に高い関心を示し、4-3で述べたように高校での歴史学習とは違って主体的・意欲的に地域学習に取り組んでいる。そこで大学生が高等学校周辺に出かけて、高校生に地域のことを紹介するツアーを実施する、あるいは高校生の旅行的行事に大学生による地域見学会を組み入れるといったモデルは、高校生・大学生の間の地域に対する認識の断絶を埋めることに寄与するのではなかろうか。パイロットスタディーとして、斉藤講義の中で「高校生に教えることを前提に地域について調査する」課題を出したが、そこには大学生の意欲と可能性を見ることができると言える。

7 実現への課題

高等学校の現場ではフィールドワークの導入は難しいとの声が高い。たとえばある高等学校関係者に聞いた話だけでも、以下のような課題が指摘された。

- ・授業時間帯に生徒を外に連れて出る教育活動は、安全管理上周到な準備を要する

- ・校外活動ができるだけのまとまった時間を確保するためには、授業変更などが前提となる。ところが選択科目の場合、同時展開される他の科目も同様に連続授業となるため、現実には難しい。さらに、授業時数の確保は生徒・保護者・教育職員ともに最大の関心事である
- ・部活動の一環としてフィールドワークをする選択肢はあるが、現行組織で新部の創設は難しい。ましてや、最近では文化部を中心に部活動加入者数が減少傾向にある

また、たとえフィールドワークという手法を用いないとしても、本論冒頭1-1-3)に述べたような要因が高等学校における地域学習の定着を阻んでいる。これらの課題は、本稿6-3-1)~3)をベースとした高大連携カリキュラムを実践し、別稿においてその効果を実証的に調査・検証したい。

4-1で述べたように【高校時の地域学習】は〈なかったが、あるとよかった〉と回答した者が2名あった。すなわち、高校生の側も地域学習に対しては高い関心と意欲を示している。たとえばラオスの学校建設支援活動に尽力した実績を持つ、高知県立高知商業高校の当時の生徒会長は次のように述べている。

「若い世代に対して、何もしたいことがない、何を考えているか分からないという印象は多くあるかもしれませんが。しかし、その中でも環境が整い、支援する体制があれば、何かをやる人々が多くいるのです」^{*37}

また、国際文化交流事業を通して国際理解・国際協力の推進に尽力している地球市民の会会長古賀武夫氏は次のように述べている。

「若者に限らず、子どもも大人も、『場』を与えられることが大切だと思います」^{*38}

本調査研究においても、行政担当者のヒアリング調査によって、次のような回答を得ている。

「今年も、アートふる山口（一の坂川周辺で開催されるまちづくりイベント）に高校生のボランティア参加があった。高校生は受験や部活動で忙しいと思う。けれども彼らは時間のやりくりをつけて参加してくれただけでなく、とても精力的に活動してくれた。高校生の社会意識の高さに深い感銘を受けた」

このように地域を素材とした歴史学習は、潜在的なエネルギーを持つ高校生の可能性を開くものであると考えられる。一方、地域側は若い世代との交流を期待し、その発想力を高く評価している。すなわちここには、高校生と地域双方にとって幸福な関係を構築するためのヒントが内包されているのではないかと認識している。こうして形成される互酬性を基盤とするコミュニティのあり方は、互助に立脚する福祉国家を築いていく上で欠かせないスタートラインでもある。

高校生を受験体制で縛ることなく、学習者と地域双方のコーディネートを実現するためには、高大連携にその解決のための1つの糸口があるのではなかろうか。

(謝辞)

本研究調査に当たってご協力いただきました宮野駅交流ステーションの和田敏男氏、宮野地域交流センターの徳田禎之氏、磯部政志氏、山口市地域振興課の熊川政則氏、郷土史家の藤原俊広氏、県立大学の江里健輔学長、西山香代子先生、人見英里先生に深謝いたします。

*1 フィリップ・アリエス（著）杉山光信（訳）『歴史の時間』みすず書房（1993）p.367

*2 佐藤照雄『地域文化を探る－地域学習の課題と方法』教育出版センター（1986）p.40には、「学習方法も教室内での講義形式だけでは効果はあがらない」との記述がある。

*3 たとえば歴史教育者協議会編『新しい歴史教育(水)』大月書店（1994）p.11には、地域素材を授業に導入することに対して「子どもを迷路に引き込むことになる」との批判が紹介されている。

*4 高柳昌久「地理・歴史教育における地域教材の意義」;in「国際基督教大学学報I-A教育研究50」（2008）pp.69-72

*5 千葉県歴史教育者協議会日本史部会編『たのしくわかる日本史100時間 上』あゆみ出版（1985）p.13

*6 黒羽清隆「社会科教育と教科書 学力形成のための試論」;in「山口県高等学校教育研究会社会科部会紀要」（1986）pp.11-17

*7 千葉県歴史教育者協議会日本史部会編『たのしくわかる日本史100時間 下』あゆみ出版（1986）p.32／前掲、黒羽,p.8f

- *8 栗林定「郷土史料の教育的利用について－歴史教育の一試案－」;in歴史教育者協議会「大分県地方史7－8」(1956) p.67f
- *9 神田竜也/土屋武志「『資料をよむ』歴史学習に関する実践プランの提案」;in「愛知教育大学教育実践総合センター紀要7」(2004) pp.145-149
- *10 佐古利南「定期試験問題作成に関するレポート～共通一次試験問題の衝撃」(1987)
佐古利南「地域を素材にした問題作成例」(1990)
佐古利南「郷土史をどう扱うか～郷土史を素材にした定期試験問題撰～」;in「山口県高等学校教育研究大会日本史部会資料」(1988)
佐古利南「文化史をどう扱うか～歴史の授業の蘇生を目指して～」;in山口県立岩国高等学校「研究雑叢2」(1990)
佐古利南「対話形式による日本史郷土学習問題撰」(1991)
佐古利南「対話形式による日本史郷土学習問題撰」(1991)
佐古利南「対話形式による地域学習歴史問題撰」(1992)
佐古利南「対話形式による日本史郷土学習問題撰2」(1993)
佐古利南「対話形式による日本史郷土学習問題撰3」(1993)
- *11 山本吉次「金沢・石川に関する『ふるさと感』と『地域社会学習』」;in「高校教育研究52」(2000) p.25
- *12 今谷順重「資料」;in大森照夫他編『新訂 社会科教育指導用語辞典』教育出版(1993) p.112f
- *13 谷川彰英『連続セミナー授業を創る』明治図書(1991) pp.18-21
- *14 外池智「高校歴史学習における地域素材の活用との連関－秋田県下高等学校の実践報告を事例として『学習材』の観点から－」;in「秋田大学教育文化学部教育実践紀要第27号」(2005) pp.2-4
- *15 長野浩典「地域の歴史を取り入れた日本史の授業」;in歴史教育者協議会「大分県地方史175」大月書店(1999) p.55
- *16 鹿毛敏夫「地域史教育の実践的構成－地域に根ざした『日本史』の授業－」;in全国社会科教育学会「社会科研究46」(1997) pp.45-47
- *17 立木貴文「地域と結ぶ歴史教育を目指して～そのいくつかの試み～」(長崎県教育論文平成9年度最優秀賞)(1996) p.3f
- *18 前掲,長野,p.54f
- *19 前掲,長野,p.54f
- *20 前掲,長野,p.55
- *21 前掲,立木,p.3
- *22 前掲,長野,p.54
- *23 千葉県高等学校教育研究会歴史部会 編『新しい日本史の授業 地域・民衆からみた歴史像』山川出版社(1992) pp.204-213
- *24 千葉県歴史教育者協議会日本史部会 編『たのしくわかる日本史100時間 下』あゆみ出版(1986) pp.144-147
- *25 泉 武夫「日本史の場合」;in Japanese Educational Research Association for the Social Studies『高校社会科の授業改造：高校教育の変質と社会科教育』(1977) p.79-82
- *26 前掲,立木,p.4f
- *27 前掲,立木,p.5
- *28 前掲,長野,p.55f
- *29 前掲,長野,p.58f
- 白井克尚「中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察－愛知県横須賀中学校『郷土クラブ』の実践の分析を通して－」;in愛知教育大学歴史学会「歴史研究57」(2011) pp.17-39
- *30 前掲,山本,pp.24-27
- *31 佐々木正道『MINERVA社会学叢書②⑩ 大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房(2003) p.359
- *32 小松隆二,白 迎玖,小林丈一『共創のまちづくり原論－環境革命の時代』論創社(2010) p.225/229

- *33 前掲,小松,p.225
- *34 住吉広行「地域の『教育力』を活用した、松本大学の人財育成教育システム－地域の課題を知り、地域を活性化できる学力・社会人を養う－」;in「地域活性学会 第2回研究大会論文集」(2010) pp.15-18
- *35 作成に当たっては、前掲,佐々木,pp.120-125を参考にした。
- *36 「山口県教育ビジョン第3期重点プロジェクト推進計画」では、平成22年度から3年計画で地域と学校の一体的な取り組みの促進を重点化している。
- *37 国際交流基金『クロスボーダー宣言－国際交流を担う地球市民たち』鹿島出版会(2005) p.97
- *38 前掲,国際交流基金,p.111

